

平成 15 年度試験研究成果書

区分	指導	題名	立毛間播種栽培により大豆・小麦の2年3作ができる	
[要約] 立毛間播種機を利用することによって、大豆・小麦の2年3作が可能となり、大豆、小麦ともに慣行並の収量・品質が確保できる。				
キーワード	立毛間播種	大豆・小麦	2年3作体系	農産部生産工学研究室、園芸畑作部野菜畑作研究室 県北農業研究所営農技術研究室・やませ利用研究室 生産環境部土壌作物栄養研究室

1 背景とねらい

本県を含む寒冷地では、大豆・小麦の輪作は、それぞれの作期が重なるため不可能とされてきたが、旧東北農試で開発された立毛間播種機を用いることにより、2年3作体系（大豆・小麦・大豆）が可能となった。この技術の普及・定着をはかるために、本県における本技術の適応性、特徴、作業体系について検討した。

2 成果の内容

- (1)立毛間播種栽培は、ハイクリアランスの乗用管理機とそれに装着する立毛間播種機を用いることにより、全県下で可能である（図1）。
- (2)2年3作体系にかかる作業時間は、播種および収穫が慣行よりやや能率が落ち、また、立毛間播種のための中耕が付加されるが、慣行栽培に必要な圃場準備作業が2作目以降省略されるため作業時間は慣行より短縮される（図1）。
- (3)収量、品質ともに慣行並の水準を確保できる（図2）。

3 成果活用上の留意事項

- (1)立毛間播種栽培の適応品種としては、大豆・小麦ともに図1の収穫期に適する品種を選定することが前提となる。
- (2)大豆では蔓化しにくく、耐倒伏性を有する品種を、小麦では耐倒伏性を有する短稈品種を選定する必要がある。
- (3)大豆は慣行並の播種期とし、小麦は適期播種とする。大豆、小麦とも間作期間の上限は20～25日を目安とする。
- (4)本研究成果は、大豆・小麦の2年3作が技術的に可能であることを示したものである。経営評価および導入モデル等は今後実施し、提示する予定である。

4 成果の活用方法等

- (1)適用地帯又は対象者等
県下全域の大豆・小麦生産者
- (2)期待する活用効果
耕地の高度利用体系による大豆・小麦の生産拡大

5 当該事項に係る試験研究課題

(739)寒冷地における立毛間播種機利用による麦・大豆輪作栽培技術の開発(平成13～17年度、国庫)

6 参考資料・文献

- (1)岩手県農政部 1996 平成7年度普及奨励事項および指導上の参考事項44
- (2)岩手県農政部 1996 生産技術体系（平成8年3月版）44-47
- (3)平成13～14年度 試験成績書 農産部 生産工学研究室
- (4)平成15年度 同上（未定稿）
- (5)平成13～14年度 試験成績書 園芸畑作部 野菜畑作研究室
- (6)平成15年度 同上（未定稿）
- (7)平成13～14年度 試験成績書 県北農業研究所 営農技術研究室
- (8)平成15年度 同上（未定稿）
- (9)平成13～14年度 試験成績書 県北農業研究所 やませ利用研究室

(10)平成 15 年度 同上 (未定稿)

7 試験成績の概要 (具体的なデータ)

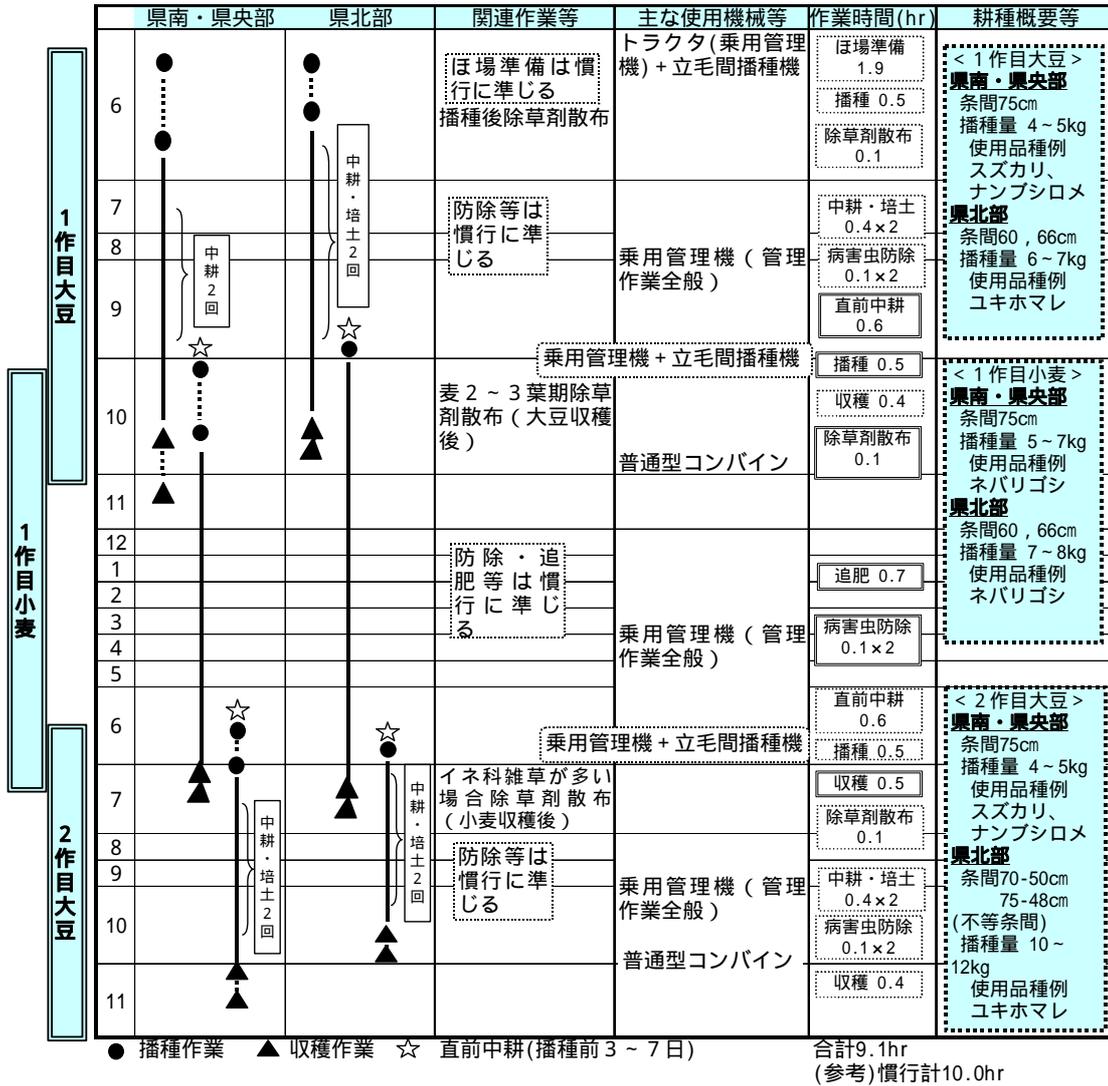


図1 県内における立毛間播種栽培2年3作体系

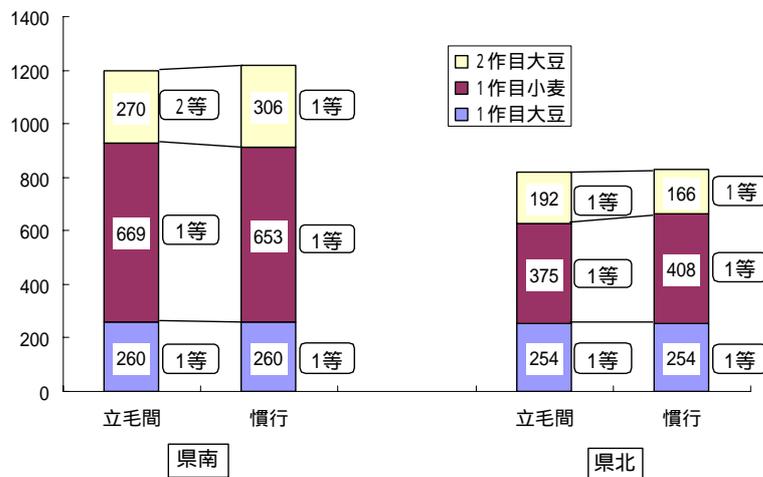


図2 収量及び品質の比較

注) 品種は大豆が県南「スズカリ」、県北「ユキホマレ」、小麦が「ネバリゴシ」である。収量の単位はkg/10a